NO.93

蓬左

HÔSA

幕末維新書翰集

名古屋市蓬左文庫
HÔSA LIBRARY CITY OF NAGOYA

「国登録有形文化財」登録記念報告

徳川園の建築文化財（2）

徳川園蘇山荘

建物の創建及び沿革

この建物は、名古屋市が昭和十二年（一九三七）、南区の新しい埋立地に名古屋汎太平洋平和博覧会を開催したおり、迎賓館の和館として建てられた。閉会後、名古屋市に寄贈され同年徳川園に一部増築して移築された。昭和二十二年から平成八年（一九九六）まで、市はここに市営結婚式場を開設し、これを徳川園会館とした。ここでは六万組の市民が挙式をし、ピークの昭和三十三年には三千組を超えた。平成十六年、修復したおり増築棟を取り外し、喫茶所として活用、平成二十六年三月国登録有形文化財に登録され、管理者が常駐して、「文化財施設の活用」と「公開保存」がされている。

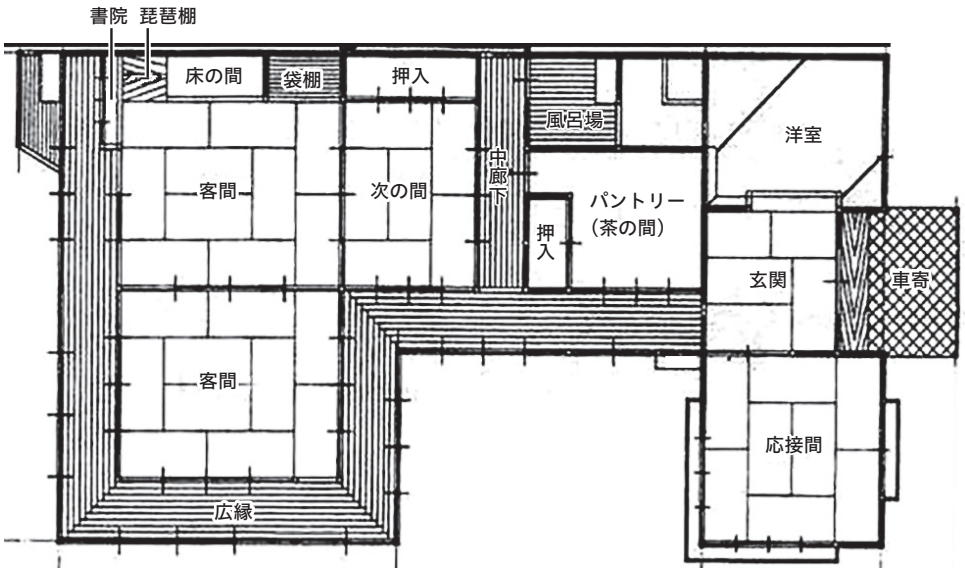
徳川園蘇山荘　現在の東正面

博覧会東会場に、賓客用接待施設として近代建築の迎賓館（施工・石田錠太郎）を建設、その後部の庭園に池を挟んで蘇山荘（棟梁・高谷精市）と立礼茶席太平茶屋及び四畳半台目の茶室鳩栖庵（設計・松尾宗吾）が建設された。計画は、邸宅配置を基本とした洋館・書院座敷と茶室の三棟構成としている。明治・大正期の大邸宅では和洋併立形式を取り、接客の場としての洋館部と生活の場としての和館部との使い分けがなされていた。

材木業者五団体の寄付（建設費一万五千円）によるが、彼等は「純日本風ノ清雅ナル建築トシ、カツ木曽材ノ優良性ヲ賞美スルコト」を目的としていた。木曽は尾張藩に属しており、木曽材の多くは名古屋で取り扱っていたことから地元の物産を宣伝するには良い機会であった。とくに木材は帝室林野局に仰ぎ、木曽より檜をはじめ銘木が調達された。

建物の構造・形式

木造平屋建桟瓦葺入母屋造（一部寄棟造）



現状平面図

建物の特徴

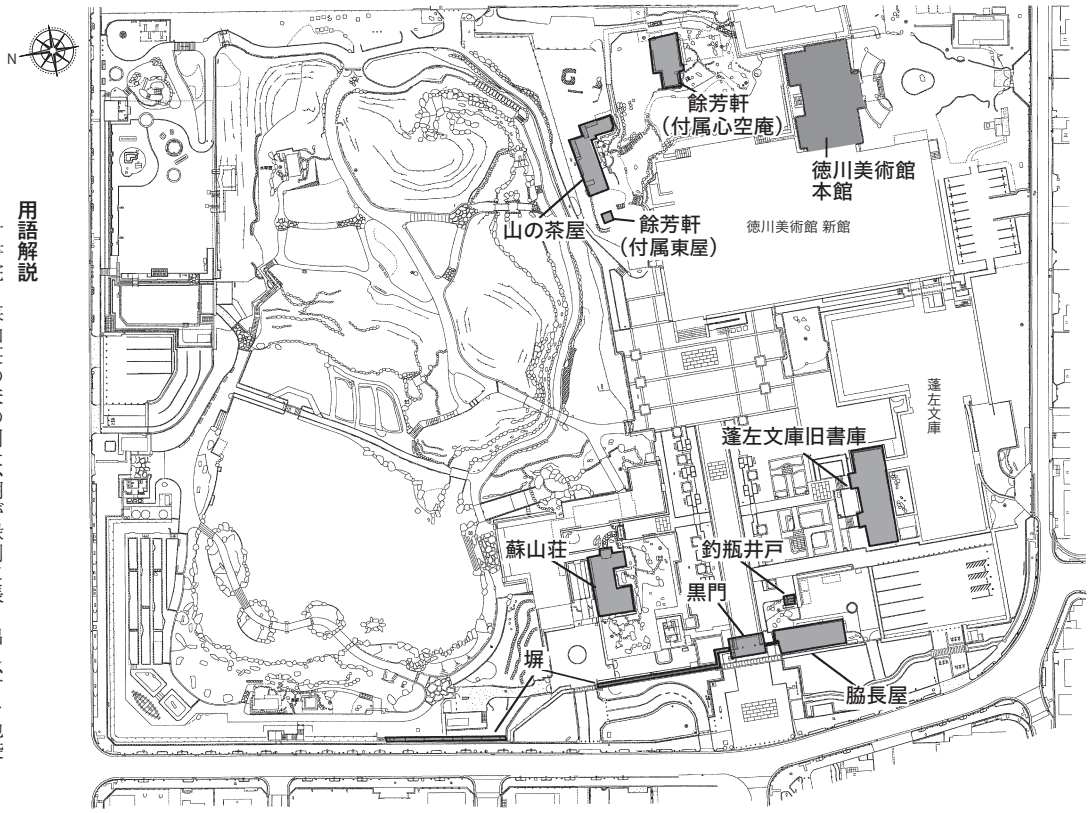
住宅形式の近代和風建築で、建築面積四十八坪（一五八・四㎡）、間口五間（九・一m）、奥行十間（一八・一m）でコ字型の平面構成、玄関部（軒高一二・七m）と客座敷部（軒高一五・一五m）、それを繋ぐ居住部の機能を分けた三区画で、その軒高も変えて外観に抑揚を持たせている。車寄せが突出しており、玄関から客間へ四尺幅の広縁が廻っている。書院造の大広間十畳二室と次の間六畳の客座敷部分と茶の間五畳・コンクリート打敷の台所・風呂場（現パントリー）の居住部分からなり、玄関座敷四畳半に、応接室で畳敷八畳の洋室が付いている。また格式の高い玄関の構えや、玄関破風の懸魚や床飾りと*付書院、襖など従来の客殿を手法としながらも、硝子戸やプライバシーを重視した中廊下の設定、和座敷だが階高を高く取り洋家具を意識した応接室、帽子掛けなど、「伝統の継承」と新しい「和風の構築」がなされており、江戸期の邸宅とは異なる近代和風を観ることが出来る。

建物の主要材料は木曽檜で、車寄せの柱は*心去り五寸（一五cm）角檜*無地物、座敷回りの柱も同様四寸（一二cm）角無地物、縁回りの柱は*心持ち四寸角、玄関腰板は檜の節板を使用し、木曽檜の良材質を表した仕様となっており、客間・居間の天井は椹、土台は羅漢柏、風呂場は高野槙、小屋組や床組には杜松など高木の針葉樹を使用し、あたかも木曽材の展示を表した造作となっている。昭和初期は木造建築の技術が最高潮に達した時代で、ここでも施工技術は秀逸、和風住宅の見どころ褒めどころの展示造りに努力している。なお、棟札及び銘札が現存している。

庭園石組も建物と同時期に移築されたが、ここでは池は造られていない。石材は佐久島、篠島、日間賀島、伊勢の桃取石、木曽川産出の石を中心に本州・四国・九州の石を使用して八州を、大海（太平洋）を高麗芝で表現している。

東立面図

登録有形文化財配置図



用語解説

＊付書院　蘇山荘の床の間は、棚が縁側に張り出し、下を地袋とし前に明かり障子を立てている。

＊無地物・心去り・心持ち　無地物は材の表面に節が無いもの。心去材は樹芯を外した材で、芯を中心に挽いた材（心持材）に比べ強固であり、大径木でないと取れないので高価である。

（元名古屋市文化財調査委員会委員　畔柳武司）

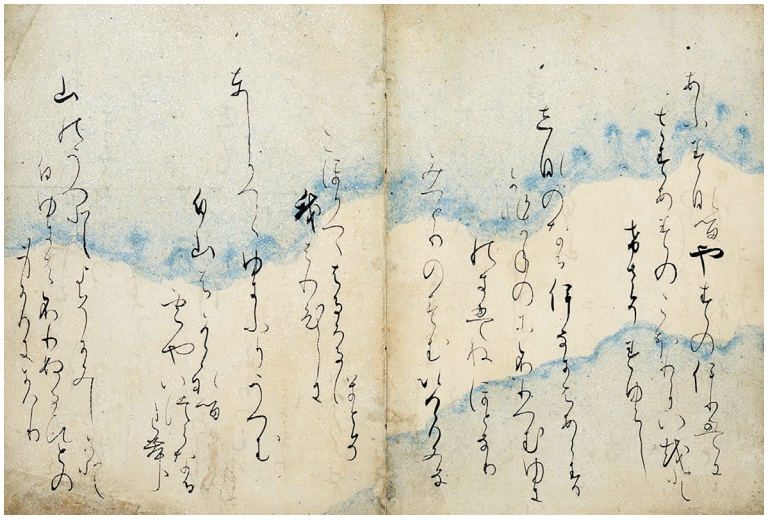
美しき かな

〝かな〟は、漢字を正式な文字とみなして〝真名（真字）〟と呼んだのに対して、略式の文字あるいは仮の文字という意味の〝かりな〟の音便形「かんな」がつまって称される文字です。漢字を表音文字として使用し、一字に一音をあてて我が国の言葉を表すことは、遅くとも五世紀後半から六世紀初頭頃には定着していき、〝かな〟としての姿が整えられていきました。奈良時代には、漢字の楷書・行書も用いてあらわす、いわゆる「万葉仮名」を用いた遺品が知られています。

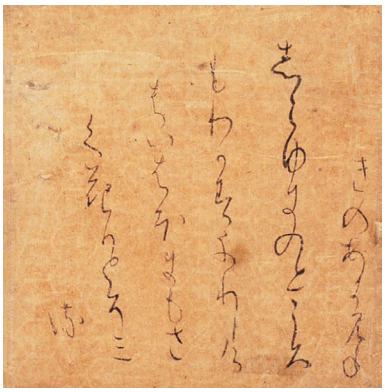
日本人のアンソロジーといえる和歌を書き記すため、女性によって開かれた「女手」とも呼ばれる〝かな〟は、九世紀末から十世紀初頭頃にはその萌芽があったとされています。その後およそ百年のあいだに著しい進展を遂げ、十一世紀中頃までには非の打ち所のない完成された字形と研ぎ澄まされた連綿の美しさ、緩急自在に運ばれた筆法など、流麗で完成度の高い品格にみちたスタイルに到達しました。現在我々が用いている仮名文字の原点は、この時代の〝かな〟に求められます。

「美しき かな」と題したこの展覧会では、「継色紙」をはじめ重要文化財「重之集」や「関戸本古今集切」「高野切 古今集」「法輪寺切 和漢朗詠集」「升色紙」など〝かな〟の黄金期を迎えた十一世紀を中心とする作品から、「藍紙本万葉集」「石山切」「大色紙」、重要文化財「三宝絵」や「多賀切 和漢朗詠集」「今城切 古今集」をはじめとする個性的かつ重厚な書風があらわれる十一世紀末期から十二世紀の作品を中心に、伏見天皇の「広沢切」「筑後切」など十四世紀前半までの〝かな〟に表現された、多様なスタイルと典雅な美意識、そしてその変遷をたどります。

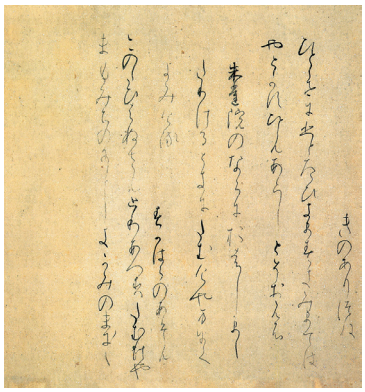
重要美術品 石山切 貫之集下
藤原定信筆　平安時代　1112年頃
徳川美術館蔵



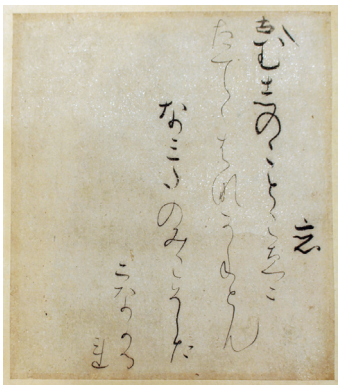
重要文化財 重之集
伝藤原行成筆　平安時代　11世紀　徳川美術館蔵



重要文化財 寸松庵色紙
伝紀貫之筆　平安時代　11世紀
個人蔵



高野切 古今和歌集
伝紀貫之筆　平安時代　11世紀
個人蔵



重要美術品 升色紙 深養父集
伝藤原行成筆　平安時代　11世紀
個人蔵

企画展　全点一挙公開

日本最大の婚礼調度 ―さちぎみ様のお嫁入り―

近衛家の養女・福君（一八二〇～四〇）は天保七年（一八三六）、数え十七歳で尾張徳川家十一代斉温に嫁ぎました。その婚礼調度は、両家の家紋と菊の折枝を散らした蒔絵の調度品で「菊折枝調度」と呼ばれます。三棚をはじめ乗物などの調度品八十余件のほか雛道具百二十余件、書画などが一括して現存しており、日本最大の数を誇る江戸時代の大名婚礼調度です。

しかし、よく見ると同じ梨子地でも文様の厚み・密度に精粗の差があり、明らかに時代の遡る調度が混在しています。実は六代継友正室の安己君（一七〇四～二五）、九代宗睦正室の好君（一七三〇～七八）が同じ近衛家から嫁いでおり、これらの婚礼調度が混在しているとみられています。

本展では、嫁いでわずか四年、数え二十一歳という若さでこの世を去った福君の生涯に光を当てつつ、その婚礼調度を初めて一斉公開します。今なお燦然と輝きを放つ菊折枝調度の全貌を探り、かつ往時における公家と大名家の豪華で華麗な婚礼を再現します。福君の雛道具が展示される「尾張徳川家の雛まつり」とあわせて、ぜひご覧ください。

菊折枝蒔絵乗物
俊恭院福君
（尾張家11代斉温継室）所用
江戸時代　19世紀
徳川美術館蔵

菊折枝蒔絵三棚飾り
俊恭院福君
（尾張家11代斉温継室）所用
江戸時代　19世紀
徳川美術館蔵

福君江戸下向行列図（部分）　江戸時代　19世紀　徳川美術館蔵

「幕末維新書翰集」と水野彦三郎

謎の「書翰集」

あまり知られていないが、蓬左文庫は幕末から明治初年にかけての書翰や草稿を年代ごとに綴じ込んだ簿冊を多数所蔵している（表紙写真参照）。その名称と請求番号を一覧にすると左記のとおりである。

名称	請求番号
（1）慶応二年書翰集	27－101
（2）元治元年書翰	27－102
（3）慶応元年書翰集	27－103
（4）明治三年来翰	27－104
（5）慶応三年書翰集	27－105
（6）明治元年書翰集	27－106
（7）文久三年書翰（尾張家）	27－107
（8）元治元年書翰集	27－108
（9）元治元年書翰集	27－109
（10）文久三年書翰集	27－110
（11）慶応元年書翰集	27－111
（12）明治元年書翰	27－112
（13）明治二年書翰	27－113

資料名をみただけでは、これらがどのような内容の史料なのかはわからないが、綴じ込まれた文書には一つの共通点が存在する。それは書翰の宛名に「水野彦三郎」の名前が多くみられることである。このことは、綴じ込まれた文書の多くが、かつては水野彦三郎という人物のもとにあったことを示唆している。

水野彦三郎（忠雄）は尾張藩の御儒者であり、徳川慶勝（慶恕・尾張徳川家十四代）の側近として幕末維新期における尾張藩政の中枢に関与した人物である。そのため、これらの資料は幕末維新期における藩政の内実を知る上で貴重な一次史料であると考えられる。

これらは現在、綴じを解いて一丁ずつ整理され、閲覧室には紙焼本も配架されている。だが、量が膨大である上に一点ごとの内訳目録が存在しないため、十分に活用されてきたとはいい難い。現在、蓬左文庫では今年度中を目処に内訳目録の作成を進めているところである。ここでは書翰集利用の一助として、水野彦三郎の経歴を「藩士名寄」や叙位関係の公文書などによって紹介したい。

尾張藩における水野彦三郎

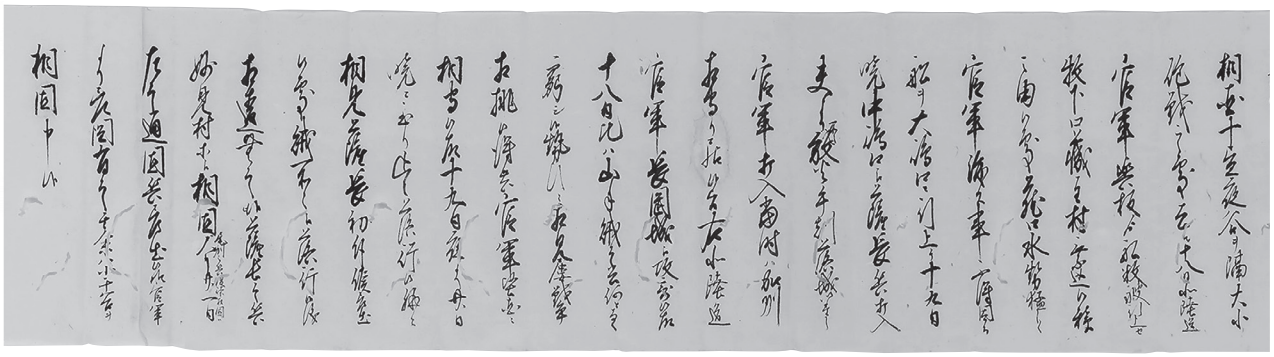
まずは尾張藩における彦三郎の履歴をみると、嘉永四年（一八五一）三月五日、「学業相励追々上達」が認められ、初めて三人扶持を与えられている（「藩士名寄」蓬左文庫蔵）。この年の二月四日、彦三郎の父松軒が病死しており、父の家督を継いだと考えられる。松軒は天保三年（一八三二）に医術出精を認められて五人扶持を与えられ、同十三年（一八四二）には寄合御医師となっている。このように、彦三郎は御医師の子として生まれ、自らも学問に励むことで扶持を与えられたが、彦三郎自身は父松軒とは異なり儒学の道に進んだ。

彦三郎は安政六年（一八五九）に「御儒者」となったのを皮切りに、文久二年（一八六二）には「奥御儒者」、元治元年（一八六四）には「明倫堂教授次座」となっている。その後、留書奉行、町奉行格等を経て版籍奉還後の明治二年（一八六九）十月には名古屋藩権少参事となっている。この間、加増や足高を積み重ね着実に出世を遂げている。

出世の背景には、尾張徳川家十四代当主で、隠居後も藩政を主導した徳川慶勝の側近として彦三郎が果たした役割があったと考えられる。書翰集を概観すると、彦三郎は儒者としての教養を基盤に、幕末の激動期における慶勝の政治活動を支える立場にあったと考えられる。では、彦三郎は具体的にはどのような事件にかかわったのか。この点を、叙位関係の公文書から探ってみたい。

明治初年における彦三郎の活動

彦三郎は明治二十四年（一八九一）に従六位を与えられており、叙位にあたって旧犬山藩主の成瀬正肥が推薦文を寄せている（「水野忠雄



北越戦争に関する報告　慶応４年（1867）５月22日付
水野彦三郎宛に送られた戊辰戦争の戦況報告。越後の長岡城をめぐる激戦の様子が記されている。

特旨ヲ以テ新叙ノ件」国立公文書館蔵）。成瀬は幕末に尾張藩付家老として慶勝を支えた人物である。

この推薦文によれば、彦三郎の最大の功績は維新前後の朝幕間における周旋活動にあるとされ、なかでも江戸城引き渡しにあたって幕吏の説得に尽力したことが特記されている。同時に提出された履歴書によれば、彦三郎は水戸藩や結城藩に対する勤王誘引工作にも関与したという。また、戊辰戦争において名古屋藩が北越に出兵した際、「軍事参謀」として活躍したこと（写真参照）、明治天皇の東幸にあたって三河、遠江、駿河三国の情勢探索に尽力したことなども記される。

文部官僚としての活躍

尾張藩において培われた彦三郎の能力は、廃藩後も文部省の官僚として発揮された。彦三郎（明治以後は諱の「忠雄」を使用。ここでは通称の「彦三郎」で統一）は明治六年（一八七三）三月末、大講義に補せられて教部省に出仕したのち、同年十二月から文部省に出仕した。彦三郎はこれ以後明治十八年（一八八五）まで文部省に奉職し、その間、内国勧業博覧会審査官や東京師範学校教諭などを兼職している（「一等属水野忠雄御用掛被命ノ件」国立公文書館蔵）。

文部省における彦三郎の勤務成績は優秀だったようで「事務老練頗ル御用弁」と評され、たびたび褒賞や慰労金を下賜されている。没年は不明だが、明治二十四年一月に危篤となり、これを機に従六位に叙位されていることから、こののち間もなく亡くなったと推測される。

今後の課題

以上のように、「藩士名寄」や叙位関係の公文書を概観すると、水野彦三郎は尾張藩の奥御儒者として慶勝の側に仕え、そのもとで明治初年には江戸城引き渡しなどに尽力し、維新後も草創期の文部官僚として重用された人物であることがわかる。

だが、書翰集の文書を概観すると、彦三郎の事蹟がこれにとどまるものではない。最初に掲げた資料名からもわかるとおり、彦三郎はすでに文久年間から慶勝の側でさまざまな重大事件に関わっていたことがうかがえるのである。今後は書翰の内容を読み解き、幕末の激動期に彦三郎が果たした役割を明らかにする必要があるだろう。

（学芸員　木村慎平）

表紙：幕末維新書翰集（ばくまついしんしょかんしゅう）（水野彦三郎来翰）

「幕末維新書翰集」とその伝来

前頁で記したように、これらは幕末に活躍した尾張藩士水野彦三郎のもとに伝わった書翰等を綴じ込んだ綴りである。ここではこれらの書翰集の成立と伝来の経緯について考えてみたい。

まず注目すべきは、書翰を綴じる台紙に文部省用箋の反古紙が使われていることである。前述のように彦三郎は廃藩置県後、文部省に長く奉職していた。このことから、書翰集は文部省在職中に彦三郎本人が、同省の反古紙を台紙にして年代毎にまとめたものと考えられる。

書翰集が尾張徳川家（蓬左文庫）に伝わった時期や経緯を伝える記録は存在しないが、第一に想定されるのは蓬左文庫を設立した尾張徳川家十九代当主の徳川義親による維新史編纂事業との関連である。義親は家督を相続して間もない明治四十四年（一九一一）頃から尾張徳川家の維新史編纂事業を開始し、自家の史料を整理するとともに旧藩士の蔵書などを積極的に収集した。現在名古屋市蓬左文庫と徳川林政史研究所が所蔵する「水野正信旧蔵書」や「奥村徳義旧蔵書」は、その過程で収集された代表的な資料群である。

これ以外にも義親が収集、書写させた資料は多岐にわたっており、その多くは蓬左文庫の請求番号25番代から27番代に配架されている。書翰集も27番代であり、文庫設立の段階で維新史編纂資料と同系統に位置する資料として整理されていたことがわかる。

もっとも、尾張徳川家では明治五年（一八七二）以来政府における歴史編纂事業の影響を受けて家史編纂を進めており、明治二十年頃には幕末維新期の慶勝・茂徳・義宜三代にわたる事蹟をまとめた『三世紀事略』が完成している。彦三郎の関係資料はこの時期に収集された可能性もある。

いずれにしても、慶勝の側近を務めた彦三郎の関係資料は、尾張徳川家における家史編纂、維新史編纂において重要な史料であったことは間違いない。

なお、これらの書翰集と同系統の資料として、左記の四件が蓬左文庫に伝わっている。

- 文武世話一条（元治元年）　27－20
- 公武御一和（文久三年）　27－97
- 征長総督　付水戸暴徒通行　27－98
- 急御用ニ而東下一条（文久三年）　27－166

これらはやはり彦三郎宛の書翰や草稿などを綴じ込んだものであるが、表題から分かるとおり、主題ごとに関連した文書を収録している。

蓬左文庫

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174

ホームページ　http://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

交通案内

■公共交通機関をご利用の場合

●名古屋駅より

【なごや観光ルートバス「メーグル」】名古屋駅前8番のりば名古屋駅発着で平日30～1時間に1本、土・日・休日は20分～30分に1本運行

【市バス】名古屋駅前2番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

【名鉄バス】名鉄バスセンター3F　4番のりば基幹バス「引山」方面行「徳川園新出来」下車徒歩3分

【ＪＲ】JR中央本線、「大曽根」下車南出口より徒歩10分

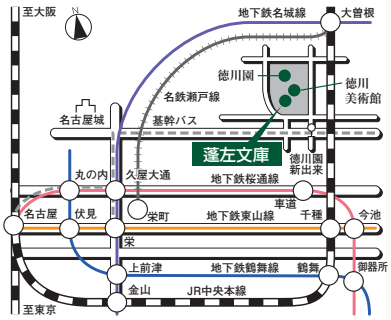
【地下鉄】東山線「藤が丘」方面行、「栄」で名城線「右回り」に乗り換え「大曽根」下車3番出口より徒歩15分　桜通線「徳重」方面行、「車道」下車①番出口より徒歩15分

●栄より

【市バス】栄バスターミナル（オアシス21）3番のりば基幹2号系統、「徳川園新出来」下車徒歩3分

■お車をご利用の場合

蓬左文庫専用駐車場はありません。徳川園駐車場（有料　30分　120円）をご利用下さい。



ご利用案内

■休館日／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※催事により変更することがあります。

12月15日㈭～1月3日㈫　特別整理・年末年始休館

■展示室／有料　一般：1200円　高大生：700円　小中生：500円（蓬左文庫・徳川美術館 共通観覧）

【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）

■閲覧室／無料・館外貸し出しはいたしません。

【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時

【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。電話・郵便による申込みも可。

蓬左文庫 Facebook

「蓬左」第93号　☆平成28年12月10日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆無料　☆不定期刊行　☆印刷：菱源（株）

※古紙パルプを含む再生紙を使用しています。